

鹿児島県大島郡与論町 朝戸方言の比喩語について

町 博 光

はじめに

1. 調査対象地：与論島は、鹿児島県の奄美群島最南端に位置している。南方28kmに沖縄本島を望むことができる。周囲21.9km、面積20.82km²。一島で一町を形成し、9小字からなる。世帯数2,141戸、人口7,150人(1988年)。朝戸集落は、島の中央部に位置し、世帯数165戸、人口567人。

与論島の生業は砂糖きび栽培を主とした農業。漁業は自給程度。これに、大島紬の生産と観光業が加わる。

近年、鹿児島・沖縄本島への船便・航空便ともに整備されてきている。

2. 調査年月日：1992年8月5日

3. 話者： 吉田義信 1916年生(77歳)

吉田ケイ 1928年生(64歳)

ご夫婦とも朝戸集落生えぬきのかたである。

4. 調査者・調査場所： 町 博光、話者宅の居間

5. 調査方法・調査時の様子：調査票を用いた面接調査。話者は調査者の伯父にあたる。調査も方言で実施した。

6. 記述方法：得られた語形を提示し、その語形の逐語訳を()に示す。話者の説明は括弧なしで記し、筆者の説明や補足はく)に入れる。▽印は補充調査したものである。アクセントは、見出し語と文例にのみ付す。見出し語で、アクセント記号の付してないのは低平調のものである。

I 《自然現象》

- 1 日照り雨 hataguri (片降り) 古 稀 ○ hataguri zutiti. 日照り雨が降って。
(hataburi からの音変化か)
- 2 入道雲 sa:kumu (白雲) 古 稀 ○ sa:kumu tatibo: naga2amja: 2aga:jūn. 入道雲が立てば梅雨は上がる。(諺) 〈沖縄本島の方角《与論島から南南西》に入道雲が立てば梅雨はあけると言われている〉
- 3 旋風 maki:hadi (巻き風)
- 4 霜柱 当地では見られない
- 5 つらら 当地では見られない
- 6 北斗七星 nibubu:ji (柄杓星) 〈nibu は水柄杓のこと。文献などに見られる ni

:bujī 《根の星》は知らないと言う)

▽ 南十字星 ʔumanupo:bujī (午の方星)

- 7 昴 buribujī (群星) ○ tīnnu buribuja: minaga ʔuidu ti:ru. Fugani mitjib ufa: wa: ʔuidu ti:ru. 天の群星は皆が上にぞ照る。黄金三つ星は私の上にぞ照る。(俚諺) 〈mitjibujī について次のような説明がなされている〉

ミーチブシ (名) 人によりミチブシの形ででも発音される。夜分に西空を向いて空を見上げる時、頭上にて三角形をえがく地点に輝やく三つの大きな星がある。その星を指す語形である。この星は、常に人間界を照らし、しじゅう自分 (または人間) を見守っていてくれる。だから悪いことはできぬ、との一種の倫理感と信仰心とが、この星に対してはいだかれている。そのような思想をいだくにいたった根底には、星は与論島民にとっては一般に、大昔から死んだ人々の両眼が天空高く飛んで行って生じたもの、その中で三星は人間界の近くにあつて、人間を監視する、と信じられていることに因由してのことであろう。〈山田実『南島方言与論語彙』p.2 昭和42年1月〉

▽ アカブシ (名) 金星・明けの明星。あかくなつて見えるからかくいわれる。(同書 p.2)

- 8 流れ星 該当語なし pujīnu tudi (星が飛ぶ) としか言わない。〈縁起が悪いとされる〉

▽ 彗星 po:kibujī (箒星) 古 稀

II 《動物》

- 9 かわはぎ pukkurubī 中・老 盛

10 ひらめ hataparaʔju: (片側魚) 大金久海岸の砂浜にいるという話だ。

11 ひきがえる 該当語なし 蛙の総称は ʔatabiku と言う。

12 青大将 ʔo:nudʒī 語源未詳 「虹」のことは nu:dʒi と言う。

13 とかげ ginagina 〈擬態語からの命名か〉

14 かまきり 該当語思い出さない

▽ ななふし jamahaga 中・老 やや稀

15 みずすまし 該当語思い出さない 〈筆者は hamigama (亀小) と言っていた。
gama は指小辞)

16 きつつき 当地には生息しない

17 せきれい 当地には生息しない

18 ふくろう mjantjiku 猫と顔がよく似ているから。 gufo:tui (後生鳥) 古 稀
gufo: の使いとされる。 〈gufo: はあの世のこと〉

III 《植物》

- 19 馬鈴薯 ジャガイモとしか言わない。
 20 とうもろこし to:to:giN (唐唐黍か)
 21 いんげん豆 2a:mami (赤豆) 古 やや稀 物そのものを見るのが少なくなった。
 22 そら豆 to:mami (唐豆) 古 稀
 23 木くらげ mingui (耳殻) 耳の形に似ているから。
 24 げんのしょうこ 当地になし
 25 どくだみ 最近見るようになったが、名前はわからない。
 26 いたどり 当地になし
 27 からすうり 見たことはあるがわからない。
 28 すみれ jumunupagi (鼠の足) 花の形が鼠の足に似ている。
 29 春蘭 当地になし
 30 母子草 当地になし
 31 ねむの木 当地になし

IV 《性向》

- 32 熱しやすく冷めやすい人 jo:2asasa (性浅さ) (2asasa は形容詞 2asasan (浅い) の語幹)
 33 あわてん坊 jo:nuga (性脱げ)
 34 動作の鈍い人 dunna: (形容詞 dunnasan (遅い) の語幹に人を表す接辞 a: が付いたもの)
 35 嘘つき jukupuka
 36 ほらふき 2ufugutji munujun (大口物言い) としか言わない。
 37 おしゃべり munujunja (物言う者) jumuđui (雀) 古 tjiritjirijumuđui (チリチリ雀) 古 稀 (tjiritjiri は雀の鳴き声)
 38 冗談言い namakujira
 39 口先だけの人 kutjibakkai (口ばかり) としか言わない。
 40 のらりくらり煮えきらない人 該当語なし
 42 怒りっぽい人 juntasabe:sa: (juntasajun で「くやしがる」意。be:sa: は「早い者」の意。「早い」は pe:san と言う) hadanja (名) 全盛 (hadanjan は「怒りっぽい」の意の形容詞)
 43 気むらな人 2ampuibufi (雨降り星) 中・老 古 稀
 44 泣き虫 nakibusa
 45 おてんば娘 wuigabantjika (pantjika は、動詞 pantjikjun (弾く) の名詞形。「とびはねる、活発な」の意となる)

- 46 腕白坊主 sa:maja: 〈sa:majun「いたずらをする」の語幹に人を表す接辞 a: が付いたもの。子供だけでなく大人に対しても使われる〉
- 47 出しゃばり 該当語なし
- 48 どこへでも顔を出す人 該当語なし
- 49 家にこもって外出しない人 ja:ni:bai (家めぼる) 〈ni:bai は珊瑚礁の穴にこもってなかなか外に出ないことから言われている〉
- 50 小心者 kimu²insamunu (肝小さな者)
- ▽ 豪胆家 kimu²upija (肝大きさ)
- 51 内弁慶 該当語なし ただ、次のようなことはよく言われる。○ ja:pīre:nu za isa: pa:pīre:nu nen. pa:pīre:nu zaisa: ja:pīre:nu nen. (家つきあいのあるのは外つきあいが無い。外つきあいがあるのは家つきあいが無い。) 〈pire: について、『南島与論方言語彙』では以下のように説明しておられる)
- ヤアビレー (名) 家庭のもの (または家族のものたち) に対し、円満にしあわせに暮らせることに、非常に苦勞すること。(同書 p.49)
- 52 人つきあいをしない人、社交性のない人 49に同じ nikumata (語源不詳) とも言うか。
- 53 妻に対して頭の上がない男 該当語なし
- 54 けち gaki (餓鬼) gakimaja: (餓鬼亡者)
- 55 欲張り 54に同じ

V 《食生活》

- 56 大食漢 munuFubu 「食べる」というのを、下品なことばでは fubukihadami (hadami は動詞複語尾) と言っていた。
- 57 ぼたもち 作らなかった
- 58 砂糖味が薄い 特別の言いかたなし sata²irija²jai (砂糖入れが少ない) と言う。
- 59 塩味が薄い zamasai
- 60 大酒飲み zābu (鍾乳洞) 〈名〉 全盛 sa²zabu (酒洞窟) saiduk²kui (酒徳利) 中・老古稀 いくらでも酒が流れこむから。
- 61 酒に酔ってくだをまく 該当語なし
- 62 酒に酔って顔が赤くなる、そのさま taFu (蝟) 蝟のように顔色が赤くなるから。

VI 《動作・様態》

- 63 恥ずかしくて顔が赤くなる、そのさま t²irakara mat²i² zid²siti (顔から火が出て)
- 64 どしゃ降りの雨 該当語なし
- 65 ずぶ濡れ・びしょ濡れになる zubukuriti (濡れて) としか言わない。

- 66 服装がだらしないさま $\overline{2apa}$ tariti (2apa はオコゼ(魚名)。tariti は動詞 taritun(垂れている)の連用形。オコゼは、魚体にいろいろなものをくっつけているからこう言われているのか)
- 67 髭がのび放題なさま pigibuta
- 68 厚化粧をしている人 特別に言わない
- 69 背丈の高い人 $\overline{go:gita}$ gita は「桁」の意か。(go: は強意の接頭辞か)
 ▽ 背丈の低い人 $\overline{2ijimami}$ (石豆) おもに子供について言う。
- 70 出びたい $\overline{pittje:tugai}$ (額とがり)
 ▽ 後頭部の出ている人 $\overline{gussunkambu}$ (五寸カンプ) $\overline{suime:kambu}$ (前後カンプ) 古稀 (kambu は後頭部の出っばりのこと。ここが出ていると頭が良いとされる)
- 71 汗がひたいから流れ落ちる $\overline{2afinu do:do: nagariti}$
- 72 目を丸くする $\overline{ma:bui nugatjannane:ji}$ (魂を落としたように)
- 73 口をとがらす $\overline{kutji tungarajun}$ (口をとがらす)
 ▽ 不平家 $\overline{gu:gu:Fukkurubi}$ Fukkurubi (かわはぎ) は釣り上げるとグーグー鳴くから。
- 74 焦げ臭いにおい $\overline{nandziki hadaji}$ (焦げの匂いがして)
- 75 遠廻り(をす) $\overline{tu:migui}$ (遠めぐり)
- 76 末っ子 $\overline{najikī}$: (産し切り)
- 77 一生懸命頑張る $\overline{purikibai}$ (狂れ気張り) (名) 普盛下 やや非難めいて使われる。 $\overline{2ikijintata:dzi}$ (息が立たない) (複合句) 中・老稀古中

まとめ

- 本土方言や文学作品などと比較して、その直截的な比喩表現が特徴として指摘されよう。ひらめを $\overline{hatapara2ju}$ 、木くらげを \overline{mingui} とする単純な命名発想、いんげん豆を $\overline{2a:mami}$ とその色彩特徴からのみの命名、とかげを $\overline{ginagina}$ とする擬声語・擬態語を用いた単純な造語などの多いことが注目される。
- その中で、大酒飲み $\overline{2abu}$ や、家にとじこもる人 $\overline{ja:ni:bai}$ などが地域の特徴のある比喩として注目される。
- 語構成上の特徴としては、《性向》を表す語で、人を意味する接尾辞 $\overline{ja:(a)}$ が語構成の後部要素としてよく働いているのが注目される。
- 比喩語も全体としては共通語化の傾向が著しいが、大酒飲み $\overline{2abu}$ や家にとじこもる人 $\overline{ja:ni:bai}$ など、方言として特色のある比喩語は若年層にも受けつがれている。

(まちひろみつ 広島大学教育学部)